

て認定されるためには人種的な差異だけでなく、生活習慣と文化の違い、とりわけ言語の違いが重要な条件になっているようである。チワン族は容貌の点で漢民族と似ている上に、漢民族と同じ中山服（日本人が人民服と呼んでいる中国独特の「国民服」。孫中山を記念した中山服という呼び方が正確らしい）を着用し、中年以下の人は中国語を話すので我々の目では漢民族と区別がつかなかった。人民公社が経営する病院を訪ねたとき、産児制限を奨励するポスターが目にとまった。チワン族はウイグル族と違って数が多いためか漢民族並みに扱われているわけである。さらに注目すべきことは、初等中等教育においてチワン語教育が行われていないことである。さきの老婦人の例が示すようにチワン語はチワン族の間でまだ生き続けている。しかし学校では北京語が教えられている以上、チワン語はいずれは消滅する運命にあるといえよう。革命後、チワン族には広西チワン族自治区の成立によって大幅な自治権が与えられることになった。しかし文化の面では漢民族への同化政策が適用されているように思われる。チワン族は独自の文字を持たなかった。おそらくこのことが漢民族の文化侵略を許した大きな要因になったのではないだろうか。ともあれ、日常生活の中で民族衣装が姿を消してしまったのも同化政策の結果といえるかも知れない。広大な中国では少数民族政策にも地域差があるようである。

## 「いろり」のある風景

斎 藤 功

ここ何年か日本各地の山村を研究仲間あるいは一人で歩く機会をえた。その際、囲炉裏をかこんでブナ帯の昔の生業についての興味ある話を聴く機会が何度かあった。もちろん、山深い村々にも経済第一主義の風潮がおしよせ、囲炉裏を中心とした山村の生活文化は消え去ろうとしている。かつて、柳田国男は山村から山村特有の特色が失なわれてゆく様相を「山村の農村化」とよんだが、今やわが国の山村には、山村の都会化が進んでいるのかもしれない。

囲炉裏を囲んで話す機会が減少しているのは、大学自体が高速度社会にまきこまれ、私自身のなかに、あるいは地理学者のなかにあった「ゆとり」が失なわれているからかもしれない。この「ゆとり」をもち続けているのが「文化人類学」と称している人達であろう。かつての人文地理学者と方法論的に何ら変らないことを研究している文化人類学が、大衆うけしているのは、この「ゆとり」のためであると思惟される。

ところで囲炉裏を囲んで話す機会が減少するにつれ、私のなかに囲炉裏のある風景がより確かなものとして定着しはじめた。それは、

燈火ちかく衣縫う母は

春の遊びの楽しさ語る

居並ぶ子供は指を折りつつ

日数かぞえて喜び勇む

囲炉裏火はとろとろ 外は吹雪

という唱歌（明治45年尋常小学唱歌）にうたわれた家族団らんによる全人教育の風景ではなく、燠をおとした朝方のもの寂しい風景である。これは、古代織物といわれる楯布を織り続けている羽越国境の山村山北村、栃の実を川原一面に干していた奥越の山村・大野市旧五箇村を訪ねた後、生れた私の心象風景である。

それらの地域では科の木の樹皮を釜で煮たり、トチの実を合せたり、紙漉きの原料である楮を軟かくする際に囲炉裏でできた大量の木灰が使われていたのである。夜なべ仕事をする際の燈火として囲炉裏で焚かれた薪炭は、針葉樹や照葉樹でなく、火力も強くやにもでないブナ帯の落葉広葉樹であった。その木灰を便ってこそ、楯布・藤布・葛布などの樹皮のあく（灰汁）ぬき、トチやナラのあくぬきが可能になったのであろう。しかし、樹皮の衣料化、堅果類の食糧化には半年ほどの長い準備期間が必要である。朝方の囲炉裏を心象風景として考えることによって、経済的にあわない伝統的生業を捨てて多くの人々が故郷を離れ、多くの山村が過疎の波に洗われている実態がよりよく解釈できると考えた次第である。

そういえば、会津の杵枝岐や裏日光の栗山村の囲炉裏の上に燠製にされたサンショウウオやイワナ、別の場所では杓子が、ずらっとならべられた様子も「いろり」にまつわる忘れられない光景である。

## 立 体 視

三 上 岳 彦

前号の談話会要旨に浅井先生が立体スライドの利用について書いておられたが、私もスライドを含めた写真の立体視にはかねてから関心をもっていたので、大変興味深く読ませて頂いた。地理学分野では、空中写真の実体視などで3次元的な写真解析の重要性が認識されているが、フィールドで撮影する写真については依然として1枚の平面的写真が幅をきかせているようである。そこで、私自身が日常試みている立体写真の撮影法とその立体視について簡単に紹介してみたいと思う。

私が立体写真に興味をもち、自分でも試みるようになったのはもう20年以上前のことであるが、米国製のステレオ・ビューアーなるものを覗いた時に始まる。一見双眼鏡のようなその装置を通して、未知のアメリカ各地の風景が眼前に手にとるように浮かび上がってきたことに興奮を覚えた。それは直径15cmほどの円盤にミニサイズの立体カラースライドを交互に配置したもので、原理的には、空中写真の実体鏡による実体視と何ら変わらない。既成の立体写真に飽き足らなくなって、それ以来いろいろな方法で立体撮影を試みるようになった。

誰もが思いつくもっとも簡単な方法は、ある被写体を一定の間隔で2枚の写真に撮るというやり方である。撮影間隔は、原理的には两眼の間隔に合わせて6cm程度で立体視可能であるが、山岳などの遠距離の被写体を立体的に再現したい場合にはさらに撮影間隔をひろげる必要がある。被写体までの距離の50分の1を目やすにするとよいという説もある。近距離のものに対してあまり間隔をひろげると、空中写真のように奥行きが誇張された映像ができあがってしまう。いずれにしても、この方法はカメラ1台さえあれば何の装置も必要とせず誰にでも立体写真を撮ることができるので、ぜひ1度試み